

二〇二二年二月一七日

大欠伸して憚らぬマスクかな
煤逃げの夫の丸き背な咎めそ
ナンクロと格闘しをる炬燵かな
雪ばんば薪割る山の一軒家
キヤタピラの土塊落とす冬田道
剪定に広ごりし庭寒椿
足早の人に抜かる師走かな
石庭のしるき紋様冬日燦
五代像見下ろす商都師走くる

千鶴
たか子
あひる
やよい
せいじ
みきえ
たか子
せいじ
もとこ

二〇二二年二月一六日

一鍬に土よみがへる寒起こし
鯛焼の鰹から割れば餡の湯気
髪染めて若づくりなる毛糸売
着膨れて恵比寿顔なる巡查かな
秒針と氷雨の音を独り聞く
一筋の日矢に煌めき銀杏散る
真夜の能登どかんと沖の鰯起し
メモになき物に迷へる歳の市

千鶴
素秀
なつき
智恵子
あひる
ぼんこ
凡士
満天

二〇二二年二月一五日

弾痕の古りし石柱注連縄を張る
着膨れて電飾街の人波に
腐葉土を脱ぎて顔だす実生の芽
ガジュマルを聖樹としたる島のカフェ

凡士
たか子
豊実
もとこ

二〇二二年二月一四日

瞬くと見るや流れし枯木星
手套脱ぎ手話の二人は饒舌に

むべ
素秀

枯山の天辺焦がし朝日出づ
日照るとき枯山躁となりにけり
伸び縮みせる鱸綱に冬鷗
海光の緋模様冬風ぎぬ
冬ざれの浜に朽ちたる手漕ぎ船

隆松
明日香
凡士
うつき
智恵子

二〇二二年二月一三日
柚人の拓きし道や滝涸るる
手袋にちやうど良き穴スマホ繰る
カレンダーメモだらけにす年用意

素秀
あひる
たか子

二〇二二年二月二日
滔々の川面へ伸びし冬木の芽
小春日に鉄のはずむ園手入れ
家中の断捨離に凝る師走かな
友厚像睨む北浜十二月
気は急けど手足動かぬ煤払
ダミ声のとびてアメ横年の暮
6Bをすこし寝かせて描く枯野

ぼんこ
明日香
やよい
たか子
満天
智恵子
凡士

二〇二二年二月一日
凧や屏風岩背に塞の神
息白く吾子の駆け来る川堤
冬ぬくし落ちて尻もちパンダの仔
無違反の免許返納して温し

うつぎ
たかを
凡士
みきお

毎日句会みのる選・二〇二二年二月一九日